

チリ: 太陽光発電の本格的導入が間もなく始動か¹

新エネルギー・国際協力支援ユニット

新エネルギーグループ

南米は今後数年の内に太陽光発電が進展する新興市場と見なされており、多くのプロジェクトが検討されている。なかでもチリには検討段階の進んだプロジェクトが多く存在し、環境審査を終えたユーティリティー・スケールのプロジェクトの発電容量は 2012 年末で 2.5 GW に達する。昨年末から今年始めにかけて下記の如く、このような段階のプロジェクトが更に増加し、チリは本格的な太陽光発電が始動する時期を迎えているといえる。

チリの電力会社 E-CL 社はチリ最北部に位置するアリカ市に建設予定の El Aguila 2 太陽光発電所 (40 MW) の環境評価レポートを環境審査局へ提出した。許可が下りれば今年 7 月に建設を開始し、来年、稼動を開始する。チリの太陽光発電開発会社 Pacific Solar 社もチリ北部マリアエレナ市近郊に建設予定の 2 つの太陽光発電所 (合わせて 123.5 MW) の環境評価レポートを環境審査局へ提出した。許可が下りれば今年末に建設を開始する。米国の太陽光発電事業者 SunEdison 社はチリの鉱山・鉄鋼会社 CAP 社との間で、アタカマ砂漠に 100 MW の太陽光発電所を建設する契約書に調印した。電力は CAP 社の鉱山・鉄鋼会社に供給される。許可申請手続きは既に開始され、第一段階の建設完了、送電開始は本年末の予定。カナダの太陽光発電事業者 Etrion 社もチリの Atacama Minerals 社との間で、8.8 MW の太陽光発電所を建設する基本合意書に調印した。最終契約書の調印は 3 月末の予定。電力は Atacama Minerals 社に供給され、稼動開始は 2014 年の予定。

現在、チリの電力需要は 59 TWh (2011 年) で、電力の 40% は水力、残り 60% は天然ガスと石炭火力によって発電されている。チリの経済は今後も継続的に成長し、電力需要は 88 TWh (2020 年) へ増加すると見込まれている。そのため発電容量を現在の 15GW から少なくとも 25GW へ増やす必要があると考えられている。

大規模な水力発電所の建設は環境負荷が大きい。天然ガス、石炭は多くを輸入に頼っており、エネルギー安全保障上の問題がある。一方、チリは太陽光、風力資源に恵まれており、今後の電力需要を賄う電源として、特に太陽光への期待が高い。2012 年発表の国家エネルギー戦略 (2012-2030) は、省エネによって電力需要の増加を抑えると共に、再生可能エネルギーの開発推進を重視している²。このため電力会社は再生可能エネルギーによる発電比率を 2020 年までに 8%、2024 年までに 10% に高めることが求められている³。

¹ 本稿は経済産業省委託事業「国際エネルギー使用合理化等対策事業 (海外省エネ等動向調査)」の一環として、日本エネルギー経済研究所がニュースを基にして独自の視点と考察を加えた解説記事です。

² 現在の大水力を除く再生可能エネルギー発電比率は 3%。

³ 2010 年、ピネラ新大統領は 2020 年までに 20% とする目標を掲げたが、その後、軌道修正。

昨年 12 月、チリ政府はアタカマ砂漠で 50MW 超の太陽光発電所建設プロジェクトの入札を本年上期に実施し、落札者には 2000 万ドルの助成金と 4 億ドルのローンを提供すると発表した。大規模太陽光発電所建設に政府が前向きな姿勢を示したことが、これまでこのようなプロジェクトへの融資に消極的だった民間銀行を動かす可能性があるとして、**Bloomberg New Energy Finance** は分析している。チリの太陽光発電の今後の進展が注目される。

(ニュースソース : pv magazine 2/14、2/1、1/30、Bloomberg 2012/12/11)

お問い合わせ : report@tky.ieej.or.jp